第９回 双葉町復興推進委員会　議事録

■日　時：平成 26 年 7 月 23 日（水）　午後 1 時 00 分～午後 4 時 30 分
■場　所：双葉町いわき事務所 ２階大会議室
■出席者：双葉町復興推進委員会委員
　　事務局（双葉町復興推進課）

（参照：第９回 双葉町復興推進委員会座席表）

１．開会

【事務局　細澤　界】

時間となりましたので始めさせていただきます。よろしくお願いしたいと思います。

それでは改めまして、復興推進課の細澤です。ではさっそく本日の会議を進めてまいりますので、間野委員長に進行をこれからお願いしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

【間野　博　委員長】

皆さん、こんにちは。御苦労様です。では第９回双葉町復興推進委員会を始めたいと思います。

本委員会、5 月 29 日に第７回をやりまして、6 月 26 日に第８回と、ここのところ２回ワークショップ形式ということで委員会を運営してきております。今日はその３回目ということで今日もワークショップの形をとって議論を進めていきたいと思います。

振り返りますと第７回、1 回目のワークショップでは、町民の今後の暮らしと町の復興についてということで、いわゆる避難先での生活をどう乗り越えていくのかというテーマと、それから、今はまだ住めない双葉町だけども、そこの将来をどうするかという２つのテーマについて第１回目のワークショップで議論していただきました。

第２回目の前回、第８回はその中の双葉町の将来像ということで、今住めないんですけどもいずれ住めるようになった時の双葉町をどういう町にしたらいいかということに絞って議論をいただくという形をとりました。議論のしづらい中で、色んなご意見をいただきました。希望は希望として出してみようと、妄想から希望へというような名言も出まして、それでご意見をいただきました。

今回は前回出していただいた双葉町の将来像についての議論を踏まえまして、今回はその将来像に関するテーマを４つに絞りました。4 つに分けられるだろうということで、将来に渡って残す双葉町をどういうふうに考えたらよいのか。それから住めるようになった時にこの双葉町をどんな町にするかという新しい町の核、シンボル作りということ。それから３つ目は、復興する為に産業が必要だということでその産業に関するテーマ。それから４つ目が次代の双葉町を担う人材をどう育成するかという、この４つのテーマについて今回はテーマ毎にグループを分けてやるという、これは第２回とは違うやり方になっています。従いましてそれぞれのテーブルでは１つのテーマについて色々意見を出していただくという形をとっていただきたいというふうに思っております。

双葉町としては今年、今年度長期ビジョンというのを作成するということになっておりまして、そこに町民の皆さんの意見を反映させるために行うというワークショップですので、その辺の趣旨、ご理解の上、活発なご意見をお願いしたいと思います。

なお会議の運営にあたりましては前回と同じですけれども、会議の公開について、それぞれのグループの発表をしていただく時間が参りますが、その時以降について公開するということに今回もしたいと思います。それでよろしいでしょうか。

はい、それでは本日もよろしくお願いいたします。

【事務局　細澤　界】

では事務局のほうから続きましてちょっと説明の方を加えさせていただきます。本日の出席者はお手元の資料１の通り、委員名簿の通りになっております。今回のグループ分けにあたってなんですけれども、資料２をご覧いただきたいのですけれども、今回は、前回の会議の際に次回はテーマ設定の下にグループ編成をさせていただきたいということでご説明しておりましたので、委員の皆様方に事前にアンケート調査を行ったところでございます。

ご回答いただいたテーマ毎に分けさせていただきましたけれども、結果の中で希望が集中したテーマとあまり希望がなかったテーマという部分が結果としてございましたので、第１希望と第２希望を考慮しまして４グループに分けさせていただきました。ご希望に添えなかった方もおられるかと思いますけれども、ご理解とご協力の程よろしくお願いしたいかと思います。

今回会議を進めるにあたっては前回同様、町長、町の幹部職員につきましては国、県を含めましてまとめの段階から参加していただきたいというふうに考えております。

では、それではさっそくワークショップの方に移っていきたいと思います。進行にあたりましては、ファシリテーターの林さんに進行の方をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

２．議事

（１）ワークショップ

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

では始めてまいります。皆さんこんにちは。毎度お馴染みのメンバーでまたやってきました。今日はね、グループも一新ということで気分フレッシュでやっていきたいなと思います。私達の方も、実は今日新たなメンバーが一人来てますのでちょっとご紹介しますね。

【ファシリテーター　中井　佳絵　氏】

皆さんこんにちは。中井佳絵といいます。去年ワークショップでお目にかかった方もいらっしゃるかと思いますが、今回の会議では初めてということで皆さんに色々教えていただきながら今日は進めていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

よろしくお願いします。

早速進めていきたいと思います。１回、２回終わりまして今３回目ということで色々なご意見がまとまってまいりました。１回、２回を踏まえて、どんな事が話され、どのようにまとまったのかというのを、ここで整理したいと思います。

皆さんのお手元にございます、資料３のグラフのような図があると思うんですがそちらに添ってご説明させていただきます。金子先生、お願いします。

【ファシリテーター　金子　和夫　氏】

これまでの議論を振り返ってみたいと思うんですが、このように現在から復興の日に向けて、この時間軸と、それから復興のレベルということで皆さんの意見を整理してみました。

まず第１回目は、現状の中でどんな課題があるかということで議論いただき、子供や若者の参画、子供の育成とか双葉を伝えていくんだとか、また子供だけではないんですが若者の自立支援とか意識改革とか、これをしっかりやっていこうという話がありました。

それからもう少し福祉とか介護の方に入っていきますと、心のケア、関連死を無くそうとか、生活の自立に向けた支援を行うということもございました。

またコミュニティの強化。今各地にそれぞれ住宅、集会所が出来つつありますけれども、さらに集会所機能を充実していきましょう。参加行事を増やして皆がなるべく会えるようにしましょう。また独居高齢者への訪問、こういうものもきめ細かくやっていきましょう。コミュニティの強化は引き続き大事ですよというご意見がありました。

また、各地に皆さんが分散して避難していらっしゃるので、町外にリトル双葉を整備していこう。小規模な拠点がいくつか分散してあってそこに行けば双葉の人に会える。双葉の文化に

触れられるとか、こういったリトル双葉を整備していこうという話がありました。

さて、こういった今日の課題から双葉町に帰還してまちづくりをやるというところに議論を展開していったんですが、この時にこの時間のベースとなる安心安全な帰還の条件、これは本当にまだ不透明なものでありますが議論になりました。空想、妄想、夢だというお話がグループの中から出されました。今は空想かもしれない、しかし、それが夢となってやがて実現するというステップがあるんだなというのが皆さんの感想だったと思います。そして、将来の復興の話を2回目中心に行ったんですが、その中では子供の為にという理念も大切にしたい。

それから、この見えない時間軸の中で故郷をどう将来継承していくのかという、故郷の継承というのも大きなテーマです。

元に戻るというよりは0からの出発、新しい出発ではないかと、こんな考え方、理念を出していただきました。

将来像につきましては、今日のテーマである4つに整理したんですが、将来に渡って残す双葉として街並みとか景観の復活とか、ダルマ市等の祭りの再興とか、歴史文化の継承ですね、こういった双葉町をどうやって残していくのかということ。

2番目は、新たな町づくりの核、シンボル作りということで浜地区の再生とか複合型センターとか宿泊施設といったものが必要になるだろう。

また町の復興を牽引する新たな産業誘致ということで大学や企業や研究機関を誘致しよう、これを国策で進めるべきだというご意見もありました。

それから次世代の双葉町を担う人材育成ということで、子供から若者まで、この人材が育つ町を目指していこうというご意見でありました。またこの過程において、双葉町だけでなく近隣自治体との連携も必要だというご指摘がありました。これがこれまでの2回の議論といったところですね。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

何となく皆さん思い出してきましたかね。

今おっしゃったように、今日は第3回のこの日は、将来像について4つのテーマに分けてそれぞれのグループで話し合っていただきたいなと思います。

その4つのテーマ。今ご紹介しましたが具体的にどんな事を話し合うのかというのを、少しご説明させていただきますね。

資料の方は皆様の今見ていただいている資料の次のページに書いてありますので、ご確認ください。

【ファシリテーター　金子　和夫　氏】

これは、あくまで皆さんが考える為の参考例ですので、これ以外にも沢山意見を出していただけたらと思います。大きく言いますと一番目は、この将来に渡って残す双葉、そしてどちらかというと記憶とか文化とかソフトとかですね、そういったものを論議していただきたいと思っております。

2番目は、新たな町、この帰還した時にまちづくりが始まるわけで、その町を創っていく過程でどのような町を創ろうかというのを語っていただきます。

3番目は、そこで働く仕事という点で、産業をどうするかということです。

4番目は、その担い手である人材をこの双葉でどう育てていくかということです。

全体は基本的には、いつの日かまだ明快な時間軸が分からないんですが、帰還した時点でこれらのことをどう進めていくかを中心に議論していただきます。ただ、物によっては帰還する過程で、こういったことを続けていくことが大事だとか、そういった未来につながる過程で取り組むべきことは上げていただいても結構ですので、お願いします。

例えばここで書いたのは、繰り返しになるという部分もありますが、例えば今日皆さんバッジを付けている方もいますよね。そこにも旗にもあります。こういった例えば双葉町のマークやキャッチフレーズといったものがみんなの心を一つにまとめて、思いをつないでいくとしたらそういったものも考えられるかもしれません。それから歴史文化とかですね。

それから町のシンボル、核づくりというのも、これから双葉町を、さっきの話でどちらかっていうと故郷をもう一度創るということと0からの出発というのはこう2つの視点があるんですが、この戻った日に、まず多分私達は双葉のシンボルとかモニュメントとか、「あ、双葉に帰ってきたんだ」っていう思いが湧きおこるようなモニュメントとか景色とか景観とか街並みを創るんではないかと思うんですよね。

それから次に触れ合う、交流する。全国の双葉の人がお祭りの時に帰ってきてそこでお祭りが行われるとか、定期的に同窓会を故郷でやろうじゃないかというのは活動の出来る場所とかですね。

それからもう一つは新産業とか色々な廃炉の関係とかもちろん色々な方がいらっしゃいます。またここで新たにまた建設業、それからサービス業、宿泊関係、色々な事業を始められる方がいると思いますので、そういった皆さんのこういった関連サービスがどんなふうに町の中に生まれてくるのかとかですね。

それから、そこで文化、娯楽を楽しめるような場というのはどうなのか。このような切り口で考えていただきたいと思います。

それから、産業なんですけれども、1つはやはり廃炉関係。時間のかかる作業で世界にも類を見ない大がかりなことが続いていると思うので、その関係の産業を研究機関というのが来るんではないかと思います。そこに働く方も大勢いらっしゃると思います。また、新エネルギー関連とかのICTを活用した農業とか、こういったようなものも出てくると思います。そのための人材育成機関とか、こんなような産業関連の動きが起きてくると思います。これについては詳しくは後ほど町から情報提供をいただきます。

それから4番目は人づくりですね。子供、未来を担う子供達をどのように双葉で育て、又その人たちが安心して働ける就業機会とかそのための職業能力の向上の為の学校とか、色んな観点が考えられると思います。

そのようなテーマでグループ毎に今日は話を進めていってまとめたいと思っています。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

グループ分かれますが内容的に被る部分もあると思うので全然被っていただいて大丈夫です。特に1、3、4、なんかは内容が被ってくるのかなと思っています。

今ちょっとご説明ありましたが、3番のところで、関連してくる事ですね。もう一度橋本さんからイノベーション・コーストについてお話いただきます。

【復興推進課　主査　橋本　靖治】

どうもお世話になります、復興推進課の橋本です。私から今日皆さんに情報提供ということで、資料を2つご用意しております。

まず1つ目は観光パンフレット。もう1つは、参考資料3というふうになっているかと思うんですが、このA3版の見開き資料について概要をちょっと説明させていただきます。

まず観光パンフレットでございますが、こちらは平成19年に双葉町で作ったパンフレットでございます。これは、中にどんな施設があったとか、例えば後は文化財がどんなものがあったとか、どんなイベントがあったっていうのを、また改めて双葉町のことを思い出していただきながら、こう地図を見開いていただいて、ここにこんな風景があったよね、とかこんな施設があったよね、こんな味覚があったよねというのも含めてお話合いをしていただければいいかなというふうに、それで準備した資料でございます。

もう1つの参考資料3というところでございますが、こちらは新たな産業の、本日のテーマでございますが現在の国の動き、どういうふうな国の動きをしているのかという情報提供で資料を準備させていただきました。参考資料3ですけれども新たな産業創出に係る国の動きということで、今国では福島国際研究産業都市、イノベーション・コースト構想研究会というのを本年1月から計7回位研究会を開催して、今年6月23日にこの報告書というのが上がってまいりました。

報告書自体は大体50ページ位のものなんですが、それをこの資料1枚にまとめたところで

ございます。この内容を説明いたします。

まず研究会の概要ですけども、政府は福島国際研究産業都市構想(イノベーション・コースト研究会)を１月に設置しました。これは、原子力災害現地対策本部長の赤羽経済産業副大臣の私的懇談会という位置付けで産学官の有識者が参加しております。この有識者の中には福島県の内堀副知事だったりとか後は双葉地方町村会長である渡辺大熊町長とか行政、それから産業関係の方とか約 20 名位で構成された研究会でございます。

この中で何を議論したかというところなんですけれども、福島で浜通り地方が特に原発事故の影響を受けてかなり復興においても中々遅れもでているというところで福島の復興の加速に向けた、何かやるべきじゃないかというところを具体的に構想という形でまとめ上げたところでございます。

この構想の中で、具体的にどんなものをやっていくべきかと主要プロジェクトとして上がってきたっていうのがこの資料のちょっと薄灰色っぽく示したところなんですが、まず廃炉へのチャレンジということと後はもう１つ、新しい産業基盤の構築という大きくこの２つで示されてございます。この構想研究会の報告書ついては既にマスコミの報道なんかもあったのでご承知かもしれませんが、決して廃炉に特化するような産業だけを誘致しようという内容のものではないです。それ以外にも新しい産業基盤を構築していきましょうというような大きく２本立てになっているところです。

まず廃炉へのチャレンジなんですが、これは福島第一原発の廃炉を加速するために国際的な廃炉研究開発拠点の整備。これは国内外の色んな知見を持ち合わせて廃炉に向けて研究、それから実施を進めていきましょうというようなものでございます。

もう１つは廃炉へのチャレンジということになりますが、ロボットについての研究、実証拠点の整備ということで、これについては東京大学の教授ですとか色んな知見をお持ちの方が色々議論をされていらっしゃいましたが、ロボット、日本はロボットについては結構研究、それから実証試験なんかも進んではいると。ただ、国の予算を使っても実証で終わってしまっているケースが多くて、それを試験的に何か実用化して動かすというレベルまで中々進んでいない。そういったところをこのテストフィールドなんてふうに書いてありますが、試作品を作って、ちゃんと実証試験をして、物としてちゃんと動くようなもの、それからそういう機械を作って売っていくというようなところまで持っていければ一番いいね、というようなところでこのロボットの研究、そういった実証の拠点なんかも整備する必要があるんじゃないかという議論でございます。

もう１つ、新しい産業基盤の構築の中で１つは、国際産学連携拠点の整備ということで、この廃炉問題について国際的な知見を集めるということは国内外から多くの研究者であったり学生が集まるというようなところも期待されるところでございます。ですからそれに合わせた会議室であったりだとか研究室機関、そういったものも設置すべきではないかというような議論でございました。

もう１つはスマートエコパークの整備、エネルギー関連産業の集積ということで、廃棄物のリサイクルなんかも行いながらそのスマートエコパークという表現をしておりますが、リサイクルしながらなんかこう電気をおこせるような供給のシステムだったりだとか、新しいエネルギー関連産業の集積というものも行うべきなんじゃないかという議論です。

もう１つは最後になりますが、農林水産分野における新産業の創出ということで、双葉町地方というのは元々農業が盛んな地域でございましたので、そういった農業、食べ物を作って売るというところが果たしてどうなのかという議論もあるのはありますけれども、その植物を作って、バイオマスというような例えば、エネルギーの燃料にするとかそういった活用の仕方も農業として新しい使い方があるんじゃないかと、そういった研究拠点として色んな産業を呼び込んだらどうかと。そういった議論がございました。

ここに書かれてある主要プロジェクトについては、もう既に中には一部具体的にものが整備され、始まっているところもございます。例えば、楢葉町にモックアップセンターというこれ

は格納炉の漏えいに関して、燃料の取り出しに関する実証試験を行うようなそういった施設を楢葉町に整備が予定されておりますが、その他のほとんどはまだ構想段階でございますので、何をどこにどんな施設を作るかというのはまだ構想としてあるだけで、具体的ではないです。ただ、この研究会の中でも学者の方とか赤羽副大臣もおっしゃっておりましたけども、実際にただ報告書で構想をまとめただけで、絵に描いた餅に終わらせないように国はしっかりと責任を持って予算付けもしながら後は地元の皆さんの産業、それから企業を興してらっしゃる方のご意見なんかも踏まえながらちゃんときちんとものにしていく用意がありますよ、というようなところの今回の報告書でございました。

この資料の下側の方には、東京電力で示しておりますこういった施設を作っていってはどうかというような計画の施設の配置なんかもございますが、もう決まって整備しているもの、それからまだ未定のものとそれぞれありますが、今日お示ししましたのは国、それから東電も含めてですけどもこういった動きで福島県の浜通り地域がこの新しい産業の拠点となるべくしっかりと国も責任を持って動いてるんだよというところを、参考資料として見ていただけたらというふうに準備させていただきました。

では今日のご議論の中で新しい産業の誘致というのも、例えば具体的にこの施設は具体的に双葉にあったほうがいいんじゃないかとか、そういったご意見になるかもしれませんし若しくはここに書かれていない新たな別な目線で見て産業を誘致すべきじゃないかとかそういったご議論をしていただければと思います。以上でございます。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

はい、橋本さんありがとうございました。じゃあ早速始めていきたいんですが、今日のタイムスケジュールをご説明しますね。

この後、グループワークの方に入ります。大体 2 時 50 分位まで皆さんでしっかり話し合っていただきます。休憩挿みまして 3 時からいつものように発表を行いたいと思っています。で、全体討議としては 40 分から始めます。最後の終了は 4 時半ということで時間通りに終了したいなと思っていますのでよろしくお願いします。じゃあ早速始めていきましょう、よろしくお願いします。

［ワークショップ］（略）

テーマ１：将来にわたって残す双葉町
テーマ２：新たな町の核・シンボルづくり
テーマ３：町の復興を牽引する新たな産業の誘致
テーマ４：次代の双葉町を担う人材の育成

（2）ワークショップのグループ成果の発表と全体討議

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

ワークのそれぞれの発表に移りたいと思います。今回はグループ毎にテーマを持って、皆さんそれぞれ違うテーマで話し合いを致しました。1 グループ、2 グループ、3 グループ、4 グループとあるんですが、1 グループは「将来にわたって残す双葉町」について話しあって頂いて、2 グループは「新たな町のシンボル核づくり」というところで話し合いをしました。3 グループは「町の復興と牽引する新たな産業の誘致」という事でイメージ構想について話し合って頂きましたね。4 グループは「人材育成」について話して頂きました。はい、じゃあそれぞれのグループの発表に移りたいと思います。最初は 1 番のグループから始めたいんですがよろしいでしょうか。発表は全体で 10 分を予定しているのですが、代表者の方が発表頂いてその後に参加者の皆さんが一言ずつ発表して頂くという形でお願いします。

【相楽　比呂紀　委員】

それでは僭越ながら相楽が発表させて頂きます。私たちのグループのメンバーが相楽、田中さん、齊藤さん、高野さん、山本さんのメンバーで「将来にわたって残す双葉町」という題で

委員会を開きました。順番に説明します。まずシンボルマークという議題に対しましては、双葉のシンボルマークは清戸迫装飾横穴古墳、これはあの今まで話を実はしてたと思ったらしてなかったらしくて初めて出たという事で、ただ双葉町に生まれた方は、皆さん一度は必ず見た事がある古墳になってると思います。この古墳を利用して双葉町をアピールしていきたいという事でシンボルマークとして、その使い方としては例えば名刺に入れてみたり、学校施設の昔は緞帳になってましたけども、そういうところで使って頂いて後世にも是非残したいという題材になりました。続きましてシンボル景観、双葉町のシンボル、町の花で代表的なのは桜、センダンとかもあるんですけども、桜を使いまして実は桜は大体 50 年位かかって大きな花になるという事で今から苗を一時帰宅なんかした時に植えていって 50 年後には大きな桜の町になればという事で期待を込めて、もしかすると衛星で見ると桜の花で何か清戸迫古墳のマークができたりというかたちの事を考えながら計画をしていくと面白いんじゃないかなという風に考えました。それからあの双葉と言えば海。山もありますが海という事で海浜、海水浴場としてまた再生できたらなと、もちろん津波の被害に遭われた方もたくさんいらっしゃいますが、齊藤さんもその代表でいらっしゃいますけども、是非齊藤さんの方から海も再生させたいという事でありましたのでこういう部分も頑張って再生できたらと思います。それと、十万山周辺、こちら山の代表として双葉には十万山という山があって毎年登山大会をやっておりましたが、こちらの周辺も整備して、もちろん除染が完了してからの話しになりますが、そういうものも整備していければなという事で考えました。あと思い出の風景として、今商工会の青年部の方で思い出の写真集という事で全町民から写真を集めて写真集をつくる事業を行っておりますけども、そういうものも一緒に考えていって町の風景とかも残していければという事です。それと町の風景の街並みなんかを大きな拡大写真にしてどちらかこういう大きなスペースに貼っていって、写真を見てみるとその町を歩いている様な思い出に浸れるのではないかという事でこういう大きな写真にして再現してみたら面白いんじゃないかなって風に考えました。

続きまして無形文化財として神楽を代表する無形文化財を是非残したいなという事で、これは映像として残せればという事で考えました。もちろん盆踊りもそうですし、神楽もそうですが各行政区毎に微妙に違う神楽だとか盆踊りの演奏があって面白いものがあって、これは是非後世にも伝えていきたいというところであります。神楽に関しましては町長なんかも大先輩で昔被って頂いてたので、是非町長が被って頂いて映像に残せればという事で面白いものになるんじゃないかなという事で提案させて頂きます。あとはダルマ市とかのお祭りですね。野馬追い、双葉音頭、せんだん太鼓等、こういうイベントを映像なんかで残して、もしかすると大きく、今ダルマ市は南台の方で再開しておりますけども、無形文化財とかお祭りは、将来にわたって今は小さいお子さんですけどもやってみたいという機会があったらそれも継承できればという事で映像に残すという事で提案させてもらいます。昔話という事ですが、実は今日いらしてる高野さんの方から提案されたんですが、双葉には、双葉町の昔話を本にまとめている方がいるという事を教えて頂きました。そういう方が本は震災後自宅に残したままきてしまったという事で、たくさんのそういう資料が残っているという事で、それは是非今後も保存をして何らかのかたちで残せればという事です。これは是非教育委員会の方に提案させて頂きたいんですけども、このような資料が自宅にある方がいるので、こういう資料を是非歴史民俗資料館なんかに持っていき保存するという事をやって頂ければなという事でお願いしたいと思います。それとこういう昔話をまとめた本があるんですが、それを双葉の訛りとか方言とかが入っている言葉で語り部形式で残せればという事でそういうものをつくっていければなという風に考えました。それから歴史ですが歴史民俗資料館の方にあのこれは再開してからの話しとして聞いて頂きたいんですけれど、歴史民俗資料館の方に結構学術的な物が多かったんですけども、民芸品なんかも置いて頂けるスペースがあると楽しいものになるんではないかという事で、震災前もあったかもしれませんけれどこういうものをつくれば面白いものができるんじゃないかという事で提案しました。実は双葉町には歴史の古墳が百以上ありましてそれを整理、記憶して地図かなんかに落とせれば面白いものができるんじゃないか、今後の歴史の文化の継承に繋が

るんじゃないかという事でこれも考えていきたいと思っております。それと歌ですけども例えば双葉町に所縁がある歌として小学校の校歌とか、中学校、高校の校歌、応援歌、それとあの双葉音頭とか、双葉の町の歌とかそういうものを町民一人一人にワンフレーズずつ歌って頂いたりして映像に残していくと楽しい歌の映像ができるんじゃないかという事で提案が出ました。それと今回の原発事故はやっぱり忘れたい方も多くいらっしゃるかもしれませんけれども、それはやっぱり今後の双葉町の歴史の中では必要不可欠なものになっていくと思います。こういう事故の資料館もやっぱり今後は必要だしこういうものを全世界に PR するべきじゃないかなという事で提案が出ました。続きまして生活文化に関して伝えるという事で双葉町の文化、生活、これはお祭りとかあった時期のカレンダーを、お祭りの日にちとかそういうものを入れたカレンダー、あと写真なんかも入れたカレンダーなんかをつくると今後皆様に色んな歴史の文化、継承に繋がるんじゃないかという事で考えました。あとは双葉町の本、これは双葉町の歴史に関する本なんですけども教育委員会さんの方に確認したところ 10 年程前にそういう風につくろうという事で資料を集めたらしいんですけども、まだ製本はできていなかったという事でこれを是非ですね製本できるようなかたちでして頂けると大変面白い重要な資料になるのではないかという事で提案いたしました。それと最後に故郷の味という事でなかなか故郷の味というのが双葉町これと言ってと言っては失礼なんですけども実は野崎先生とかを呼んで故郷の味一品をつくろうという企画も震災前してたかと思うんですけどもそれも途中で終わったという事で今後そういうもの、開発途中になったものを是非今後完成させていければなという風に考えております。それと双葉町には大変美味しい食堂、ラーメン屋さんだったり、中華料理屋さんだったり、寿司屋さんだったりあったんですけども、その方々になかなかそれを継続して作って欲しいというのは難しい部分もありますので年に一度とか何かのイベントの機会にその方々に集まって頂いてそういう施設を提供して例えば私が知ってるところでは一福屋さんという中華料理店さんがあったんですけども、そこの雷ラーメンという大変美味しいラーメンがあったんですけどもそういうものを再現できればな、それが一日だけでもできれば皆さんの思い出づくりにとかになるんじゃないかという事で、そういうのも企画させて頂きました。将来にわたって残す双葉町というのは大枠こういうかたちで提案させて頂きます。それではお一人づつ補足という事でお願いします。

【齊藤　六郎　委員】

齊藤です。双葉町と言えばやっぱり海と山と原子力の町というのが双葉町のキャッチフレーズと言いましょうか。まあそういう事で双葉町にはその海水浴場、郡山の海水浴場これは是非残しておきたいものだなと思います。それから山と言えば双葉町十万山ですか、そして原子力の今は事故が起きて後は事故の記録として何と言いましょうか廃炉と言いましょうか、事故の町として恐らく歴史として残っていくんじゃないかなと思われます。いずれにしろ今相楽さんからお話しがありましたような事を皆で話し合いました。以上です。

【高野　陽子　副委員長】

高野です。相楽さんが詳しく説明してくださったので特に私からは無いんですけれど、昔から今までの双葉町、昔話も歴史も全部含めて今までの双葉町を震災後、町民の人達の今の気持ち、声、そういうものを含めて表しながら次に、しっかり残して将来にわたって伝えていくって今の作業が凄く大事かなって、声も映像も全部双葉町の言葉も残しておきたいなって、だから今の高齢者の方々の言葉も昔話の中に残しておきながら次の方達に伝えていければなと思いました。

【山本　眞理子　委員】

山本です。先程相楽さんから話が出ました清戸迫やダルマ市、盆踊り、そういうのが一番心に残っていると思うんです。年代別若い世代によっては、またこの話の内容が変わってくると思います。若い世代にも集まれる場を設け、ワークショップの形で実現できればよいと思っています。私は人が人を動かすと思っているので、自分で動いてその動きを人が見てなにか感じさせる様な行動を町民の一人一人が起こせば皆で復興に向けて何か一歩踏み出せるのではない

かと思っています。町は帰還困難区域ではありますが町の何処かに懐かしい景観が実現される事を希望致します。以上です。

【田中　勝弘　委員】

田中と申します。私はここにあります原発事故の歴史って事を提案させて頂きました。ここにいる多くの方が原発の事故を経験しております。そんな事でこちら双葉町の歴史文化の継承と同時並行で原発事故の歴史も継承して頂きたいなと思っております。具体的には国立の資料館こういったものを建設して頂いて原発がですね一度牙を剥いて放射能を吐き出したらそこにいる住民は住民の生命と財産を奪われるんだとそういった事を私達双葉町民、双葉町は全世界に発信する使命と義務があると思いますのでそういったところもひとつ取り入れて頂いてビジョンをつくって頂ければと思います。以上です。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

ありがとうございました。1 グループの皆さんどうもありがとうございました。2 グループの皆さんいきましょうか。2 グループは代表小川さんなんですけど皆で発表する状態でいくんですね。

【小川　貴永　委員】

2 班は「新たな町の核、シンボルづくり」というテーマで、岡村さん、私小川、横山さんと大人数で議論させて頂きました。大体大まかなテーマは今までの双葉町をいかに再生するかという事とこれからの双葉町をどう考えるかと、この２つのテーマで大まかにはやりました。シンボルづくりって事でこの言葉通りシンボルとして考えますが、1 班でも同じだったと思うんですけど双葉町でしか無いっていうものをイメージしますとやはり清戸迫横穴式古墳があげられると思います。これちょっと清戸迫の方を例としたもので私ちょっと震災前に、自社製品のマスコットとかそういうので使おうとして考えて全部お蔵に入ってしまったってものなんですけども、これはこの清戸迫式横穴をディフォルメしたものです。こういったイラストにしたものです。震災後僕ちょっと暇だったからって訳じゃないんですけど、多忙の中ちょっとあのこういう風に立体化したものがこれです。こういった僕は震災前は農家レストランなんかをちょっとやる計画でしたんでそこでちょっとストラップとして売ったりですとか、こういう雛飾りみたいな物で売ろうと、販売しようっていう計画があったんでまあ一つシンボルとして清戸迫横穴式古墳の方を例にとってつくったという事でこういう風に出させて頂きました。これ別に他のもので色々考えてもいいんですけれどもこういった双葉町って非常にそういう歴史的にこういう古墳ですとかが残ってますんでそれを漫画なんかにして、資料として後世に残してもいいんじゃないかなと、またこういう双葉町の歴史民俗資料館みたいなものをまたつくって伝承館として残してもいいんではないかという風な意見、提案であります。それとあとコミュニケーションの再生という事で色々構想しましたんでこれは横山さんの方から説明して頂きます。

【横山　敦子　委員】

横山です。先程の山本さんの発表の中に「人を動かすのは人」というお話がありました。私も同感です。人づくりが今後の町を支えていくのだと思っております。今まで双葉にあった、強いきずな、隣組制度の助け合いの精神、そういうものをもう一度再生させるような教育を続けていかなくてはならないと思います。高齢者の方や障がいをお持ちの方、そして町民が安心して生活できる地域の仕組み作りが必要になってきます。それとともに介護や医療に携わる専門職の育成についても、学費の免除や支援などを行い全国から人材を集めていく仕組みを作っていただけたらと思います。

【岡村　隆夫　委員】

岡村でございます。前回もそうですし今回も一つ目の発表もありましたけども、今双葉町はいづれ仮の町ですからここでどうやって皆を繋いでいくかという考え方、皆一緒です。またこれをやっていかなければならないだろうと。私は今回新たな核という意味で将来この国のお金でもちろんこの双葉町又、双葉郡へアトムバレーをつくって欲しいなと。これアトムバレーは放射能がやっぱり今回の問題で出た訳ですから、やっぱりこの放射能に関する問題としてはア

トムで双葉町を再生するのも逆転発想じゃないかなと思ってます。そのアトムに対しては色んな問題がこれから出てきます。今横山さんからも出ましたけれど今世界の原子力も一旦暴れだした時にはどうしょうもないという所で今あると思うんです。チェルノブイリもしかり、そういう意味でこの折角のこの検証というものを早く使って、自分のものに日本人のものにしてこれを産業に進めていけばいいんじゃないか、そうするとこれに対して今双葉町を始め、この双葉郡の子供達にこういったものでハイレベルの教育、産業、仕事というものを繋いでいけば将来はそこで人達がそこへ住んでくるという意味で町づくりができるんじゃないかと、そういう意味でこのアトムバレーを提唱させて頂きました。

【小川　貴永　委員】

今の岡村さんの方から説明して頂いたアトムバレーっていうのは新しいこれからの双葉町という事で構想したものですが、それとあと本来の双葉町をいかに再生するかと故郷としての双葉町として、こういったせんだん太鼓ですとか、あとマリンハウス双葉、バラ園、それとあと双葉町の郷土料理、双葉町と双葉地方の郷土料理を出すお店、これはまあホッキごはんとか秋刀魚のツミレ汁だとかそういったものを再現するものとこの新しいものと元々あるものをいかに融合させていくかというのが一つのテーマで出ました。それらの共通するっていう事でまずその現在の双葉町の場所で再生していく為に一番根本になっているのが水源ではないかと。まずその水源、水っていうのはその衣食住の基本でありますしまず飲料水としての役割、それから農業用水、それと工業用水、何をやるにしてもその一番の要になるものであると。そこのあの水が果たして飲料水、それから農業、工業用水として使えるものなのかっていうのは精査しなければならないしそれをきちっとやって安全性の確保っていうものをしたうえで初めてこういった計画も具体化していくんじゃないかという風な提案です。その中で例えばその農業を使って逆にその海が使えないとか、土が汚染されてるという状況の中で何ができるのかというものも検討する価値はあるんじゃないかと。その中にはまた新しいその農業技術を取り入れたりだとか、それとまた非常用食の技術なんかもありますのでそういったものも研究する価値はあるんじゃないかという事で提案させて頂きました。以上です。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

はい、ありがとうございました。3グループいきましょうか。

【菅本　洋　委員】

第3グループで、Fっていうのは双葉ヴィレッジ構想という事でこの伊藤さんと、私菅本です、それから川原さんと、高田さんと四人で一応無い頭を絞って多少出たかなという感じでございます。それでまず国策として早期に推進して頂けなきゃならないっていう事は国が方針をできるだけ早く示して欲しい。これはどういう事かと言うと結局除染関係とか復興に関して、色んな提案があると思うんですがやっぱりこれはまず除染をしてそれから町がどの程度まで除染できるんだか、また期日がいつまでになるんだかいう事をまず町と国との方でしっかりと話しを詰めて頂いて、この事が進まないと今から言う事が全部できない訳です。ですからこれはきちんと方針を示すべきである。それからステップ毎の計画が必要です。ステップって言ってもやっぱりあの一歩一歩上がっていく訳ですけど、最初に決めてかかって後からそれを追っかけるんじゃなくて国の政策っていうのはそうですよね、何でも、今までは国の政策として。県もそうかも知れませんけど。そういう場合にはやっぱりこのステップ毎にやっぱりやってくべきじゃないかと、そうでないとやっぱり住民が戸惑ってる訳ですよ。これから先どうなんだと、目の前が真っ暗ですよね、明るいものが何一つ無い。そういう事では困るという事です。それからやっぱりビジョンが必要である。それから優遇が必要であると、これ優遇というのはやっぱりビジョンとか優遇って言うのはやっぱり国策でここの中でこの双葉町が中心に廃炉関係、除染の施設、それから原子力発電とありますけどもエネルギー全般、特に原子力関係、総合的な研究所、それからロボット関連企業なんかもこれからはどんどんと世界一のロボット王国ですね日本は。それの産学関連の拠点の整備、世界に絶対に自信を持てるこういう様な廃炉に関してエネルギーに関しての材料がいっぱいある訳ですよ、福島県には。特にこの双葉町には原

子力発電所が今ご臨終にある一歩手前の廃炉がある訳ですよ。これを研究材料としてやらないという手は無いと思います。是非ともやっぱりこれは日本国内ばっかじゃなくて世界に誇れるそういう研究所を是非ともつくって欲しいとこれはやっぱり国策でもって話しを進めて頂きたいという事でございます。それから次は、世界からの結局こういう事をつくる事によって世界から学習体験、それから研修とかそれによってまた観光客も押し寄せて来るんじゃないかと。今のチェルノブイリだって相当な人が今この原発があった事によって日本全国の発電所を抱える町村が皆さんチェルノブイリに行って研究している訳ですよ。こうなった時にはどうなんだと、色んな事をやっぱり聞いて来てますよね。それによって観光というものも福島の場合には特に双葉町と大熊町っていうのはある訳ですよ。それを目の前にぶら下がっているものをぶん投げる訳にはいかないから、これもある程度は産業、観光産業というものも育てていかなくてはならないんじゃないかと言う事でございます。それによって周りには今度色んな職業がありますよね。それがこの関係の双葉町が中心という廃炉、除染、エネルギー、原発の研究所、ロボット関係の色んな事があるんですが、これがやる事によってこの商業、サービス業、それから民間企業、ホテル、旅館、そういうものがこれ付いてくる訳ですよ、必ず。施設や何かを整える為にはもちろんこの関係の商業、サービス業、民間企業、色んな会社ありますけどもそういうものがくっついてくる訳ですよ、やがて。そうすれば双葉町は何処にも引けを取らない素晴らしい町になるんじゃないかと。ただこれが国の方針がいつ示せるのかっていう事です。示して頂けるんだか。これが一番の鍵だと思います。そして結局それによって潤いの、心の休まり、憩いの場っていうか農業は確かに放射線関係で難しいかも知んないけど、ハウスの中で育てる花卉栽培だとか、バラとか色んな事があるんですが、そういう物も淡々と育っていくんではないかと。それから先程良い様な事、この英語人材育成、結局英語圏です。これやっぱり国際語ですから。私のお友達の大学教授なんですが国際っていうのは英語ですって、3 歳児から教育すると絶対忘れないそうですよ。3 歳から始めると。だから幼稚園にしてもやっぱりこれからの教育っていうのは小さい時から育てていけば絶対大丈夫だそうです。忘れないそうですから、三つ子の魂いつまでもとあるように。是非ともこれはそういう様な事で世界に通用する双葉町の人間になって頂ける様な環境を是非ともお願いしたいというところでございます。私の方からは以上でございます。次に。

【伊藤　哲雄　副委員長】

次、私伊藤と申します。今菅本さんの方からほとんどなんか説明されちゃって言葉にならない状況なんですけど、私が一番強調したい事は早急に国策として、廃炉と産業を一番先にやってほしいなと思っております。これを起爆剤にして双葉町の新しい都市づくりを進めてもらいたいなと私ながら思っております。宜しくお願いします。

【川原　光義　委員】

三人目ですからますます喋る、いよいよ無くなりました。この題はエフヴィレッジ構想と非常に壮大で大きな問題なんですけど、私達からいけば我々一人ひとりは貴重なその体験者であり、一人ひとりの証言者です。ですから菅本さん言わなかったけども、7 年後のオリンピックのときにあのジャパンの原子力災害の町はこのように復興したと世界に発信できるような証言者になっていきたいと思います、以上です。

【高田　秀文　委員】

高田です。今日もあの国の関係の方もいらっしゃると思うんですけど、あくまでもこれあの 10 年、20 年、30 年後の話しなんですね。実質私達はこの時にいるかどうかも分からない。皆さんいつも妄想、構想と言ってますけどそれがそういう風にならないように国が責任を持ってこの国策としてやって頂かなければ中々その一般企業はじゃあすぐに 10 年後除染が終わったから一般企業がはいってくるかって言っても中々そういう事はあり得ないと私は思っています。なんであくまでもこの国が中心になってやっていかないとこの下にぶら下がっている企業は入ってこないし双葉町の復興は無いと思いますので宜しくお願い致します、以上です。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

3グループの皆さんありがとうございました。男性が4名となると凄く力強くていいですね。最後4グループの皆さんいきましょうか。

【松本　浩一　委員】

それでは4班宜しくお願いします。私松本です。私達に課せられたテーマが「次代の双葉町を担う人材の育成」という事でありました。その為の前回も妄想、空想であったり、その為の発想であったり、よりそれを具体的にする為の構想って事を考えて、それを軸に考えていったつもりであります。あの班で最初に話し合いが始まった時に私ちょっと途中で部屋を抜ける事がありまして 3 人で話してたのが、「夜になると今の頃せんだん太鼓がこの練習してたよね」なんて話が聞こえてそうだったなと思い出しました。私もこの相楽さんと近所ですので消防屯所の所で夜になると聞こえて懐かしいなと思ってました。その節はどうもありがとうございました。

そんな現状からそういう事って今どういう風に継承されているのっていう事で今双葉町の小中学校等では故郷を知る学習っていうので、双葉の良さを知る総合的な学習をやっているんだよという事も話しになりました。

それからちょっと話が飛ぶんですけれど、最後にどういう風に双葉町がなっていれば良いかと、いわゆる妄想、空想の部分を、世界一の研究機関ができて、それから双葉でしかできない、いわゆるこの未曽有の災害を被った町として、地区としてそれを基にした研究、そしてそれに基づく企業なり雇用が生まれているっていう、それでしか双葉に住む人は増えてかないんではないかって言う風な発想です。ではその為に何をするかっていう話になったんです。例えば私達の双葉町も高齢者が多くて、戻る人も高齢者が多いんでしょと、そうすると介護施設の充実とか、そこで働く人たちの福利厚生の充実という話しにもなりました。日本一の雇用条件を満たすような事、日本一の被害を被ったんですから、そんくらいもらってもいいんじゃないかっていう事が出ました。これはまあ空想、妄想の部分なんですけど。発想としましてはでもそれだけじゃ駄目なんじゃないかと。この研究機関をつくる為にはバイオマス研究とか、大学の農学部なんて事も前回出たんですけれども、新たな産業創出に係る国の動きとしてイノベーションコースト構想研究会などというのも出されました。その為には大学の農学部等で、それからバイオマス研究等も進められるという事でいわゆる産学連携の取り組みが必要なんじゃないかという事です。そうすると大学ができればそこに経済の動きができてきて若い人もそこに定着するかもしれないなという発想でありました。現状はどうかと言うと今双葉町に限らず、双葉郡の学校では色んな特色を出して子供達を多く残って頂いて、双葉の良さを知る様な取り組みをしております。その中で更に双葉の学校がどんどんどんどん充実していく為には言葉が適切かどうか分かりませんけれども、「この学校に入れて良かったな」というお得感が無いと保護者は入れないんじゃないかという話が出されました。もっと具体的に言うと双葉の学校に入ったらば成績が上がって、自分の子供の力以上の学校に入れたとか、スポーツでどうこうなれたと具体的なものが必要なんじゃないかなという話しにもなりました。ちょっと話しがまとまらないんですけれども後はこんな所でいいですかね。後は個人個人で力説している部分もございますのでそこ重点的に話して頂いて私の補足をして頂ければと思います。中谷さんお願いします。

【中谷　博子　委員】

中谷と申します。私は生まれも育ちもずっと双葉町で現在もあの双葉町で双葉町の町民支援に携わる仕事をさせて頂いております。避難してみてあの初めてというか双葉町の温かい雰囲気というか地域性がどんなに素晴らしいものだったかというのを避難してあの本当に実感しているところです。私は今小学4年生と1年生の子供がおります。子供達にも私が自分でこう生まれ育ったその双葉町の温かい双葉町の雰囲気っていうものを感じる機会を是非持たせてあげたらなと常々思っております。残念ながら町立の小学校の方には通っていないんですけれども、実際あの今後こういった特色のある小学校、こういた事を努力されて皆さん今考えて色々な魅力ある特色がありますので、こういった所に通わせたいというのにはやはり親の世代、子供の一番最初の舵を取る親の世代、私達親の世代が意識改革というかこういった所に通わせたいと

かそういった風に思う様な機会がある事も人材育成には必要かなと思っております。今後そういった機会、学校に通えない子も含めてですがこういう機会をたくさんつくって頂く事を期待しております、以上です。

【石田　恵美　委員】

石田です。私は双葉ダルマという物を次代に継承する為にと思って今努力している所なんですけれども、次の人に伝えていくのには中々難しい問題がありまして、場所とか、あの人が集まらないだとか、色々あるのでそれを何とかしていきたいなとは思っているんですけれども。中々思うようにいかないんですが細々とながら子供達の所のダルマの絵付けとかなんかの所をやって次に少しずつでも繋げていけたらなと思って努力しているところです。そんなところで終わります。

【大橋　正子　委員】

本当に 4 グループの内の最後になりましたけれども、あの私はちょっとあのこんな風に考えてるんだなっていうのは双葉に子供が例えば戻るにしたら奨学金を最初からふんだんに出してやるとか、後は技術を身につけたいんであれば特色のある、この前あのうちの孫が学校で宇宙飛行士の山崎さんが来たっていう事でその話しを聞いたら凄くその宇宙に興味を持ったんですね。だからそういう風な所からあの進学なんかもそういう風な所に進学をさせて、最初に言った様に研究機関なんかに就職できて、そこに行ける様な人材育成も必要かなってこう思いました。それでその為にはあの高専の先生を呼ぶとか、山崎さんみたいな特色、特徴のあるような人達を呼んでくる今度の中高一貫教育、そういう風な所にあのできる限りその双葉の子供達にあがってもらって将来は双葉に戻って頂ければいいなってそんな風に思った次第です。以上です。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

4 グループの皆さんどうもありがとうございました。それでは皆さんの思い思いの発表が終わった所で皆さんの発表をまとめたところを一度ご説明したいなと思ってます。金子先生お願いします。

【ファシリテーター　金子　和夫　氏】

今日はそれぞれテーマが決まっていますので詳しい内容は各発表に任せたいと思うんですが、そこから見えてくる考え方とかポイントを私なりに拾ってみました。

まず一つは将来に残す双葉町なんですけど、二の面があると思います。一つは今ある物を記録、保存して未来に伝えていこうという考え方で、これはたくさん意見がありました。もう一つ思ったのは、桜の森ですけれど未来に繋がる作業として今から着手し 50 年後だとか 100 年後に花開く様な事、「こういう事も考えられるね」という感じだったと思います。その様に二つの時間軸みたいなものがあるのかなと思いました。未来に向けて繋がる事をやってこうといった時に若者とか子供に呼びかけながらできるんじゃないかなと思いました。

それから 2 番目なんですが町のシンボル、核づくり、これは大変難しいなと思ったんですが、色んな観点があって 1 番目にもかさなりますがシンボルとしての清戸迫ですか、これはこちらと一緒でしたね。ですから清戸迫は皆さんの中でこう議論してたら一番大きなこの町のシンボルなのかもと思いました。それから人づくりが大事ですよと、その為には教育と福祉ですよっという話しと、戦略プロジェクトとしてのアトムバレーという話しが際立っていたかと思います。ただその中で生きるっていう事で実際には水の問題だとかどうなるのかなという問題もありますねっていうところですね。

それから新産業の誘致については国策として推進というのがもう必須だという事ですね。イノベーションコーストとか観光産業について国策として進めて頂く中で地元主導で商業、サービス、花卉とかこういった物にも地元として頑張っていきたいと、そうでないとこの左側が見えない時に地元としても動きづらいということだったんじゃないかと思います。

それから人の問題は中々面白く聞かせて頂きまして鍵は優秀な小中高校教育ですよね。その為に福祉の話しがどう繋がるのかなと思ったんですが、親が戻れる環境という事だと思うんで

すよね。子の親が安心して住める、さっき福祉日本一という言葉がありましたね。そういう意味で親が安心して戻れる環境ならば子供を連れて帰っていき、そこに一旦帰れば海外研修だとか奨学金だとか優秀な教員という事で非常に恵まれた環境で思う存分勉強して先程のイノベーションコーストなどの産学連携就業機会等も見えてくって事でございました。これはこれで一つ方向が見えるんじゃないかという風に思いました。ちょっと全体的な話しでした。

【ファシリテーター　林　聖子　氏】

ありがとうございます。ではここからは全体討議となりますので間野委員長にバトンタッチしたいと思います。宜しくお願いします。

【間野　博　委員長】

一応それぞれの発表が終わった所で今から全体討議という事なんですが、今日はこれまでと違って自分が参加するテーブルは1つのテーマについてしか議論できないと、発言できないという場だったので、実は他のテーマにも関心があったんだけど取りあえずこっちのテーブルで議論したという人もいらっしゃると思います。特に第2グループの方達は皆さん第一希望ではないテーマについて議論して頂いたので元々第一希望だったテーマについてはご意見があるんではないかなあと思います。それに拘らずそれぞれのテーマについて私はこの発表を聞いて他にもこんなものがあるんじゃないかとか、あるいはさらにこういう事をやったらどうかだとか、その辺りの事を出して頂くとそれぞれのテーマがより膨らんでくるなあと思います。その辺りでまずは特に自分のやったテーマ以外のところのテーマの発表を聞いて何か思った事とかってありませんでしょうか。2番のテーブルの方は実は第一希望は4番の人材の所だったんですよね。その辺でその4番の人材育成に対して2番のテーブルの方からどうですかご意見はないでしょうか。教育委員長如何でしょうか。

【岡村　隆夫　委員】

あのかなり難しい問題で、今日の話しの中でもほとんど出てきてると思うんですが、私ここの中でスピードと言う事について申し上げたいんですね。やっぱり今双葉町を一つにしておく事が何よりも大事だと思って、一つにするにはどうするのかって言った時に私は今双葉町のパンフレットを発送すればいいんじゃないかという様な問題じゃなくて、やっぱり顔を見て、「んだべ」という言葉で話をする事が繋がっていく事だと。そういう意味で私はその当初から思ってんですが復興住宅の復興まちづくりっていうか仮の町づくりこれを一日でも早くやる事、そしてその親のやってる事、姿を子供達に見せると、それが継承じゃないかと思います。ですからこの復興住宅、色々問題点はあろうかと思うんですが、早急に心の離れないうちに実現をさせていかなければならないと思っております。それが私子供への教育の伝承の最大の目的っていうか大事な所だろうと思います、宜しくお願いします。

【間野　博　委員長】

まずは復興住宅から初めて、それで今日提案されてる様な事が段々とこう繋がっていくというような事が必要だという事ですかね。他如何でしょうか。

【小川　貴永　委員】

私は、本当は産業を希望だったんですけども、一つはそのまあ町外拠点というか復興拠点というものをどうつくっていくかっていう事とまたもう一つはその戻れない間双葉町をどうやって再生していくかという事の足がかりをどこから具体的に手をつけていけばいいのかというのが一番興味があるところでして。その中で、今日はちょっと水の方の水源の確保っていうのを出したんですけども、それとあと新エネルギー構想と言うか例えば現在その双葉町の土地を活用するって意味で、太陽光発電であるとか、地熱発電の具体的にそのどの位の発電量があるのかとか、それが年間を通してどの位の物が作れるのかというものを具体的にデータとしてちゃんと取っていく為に小さいかたちでそのシステムを設置するとかっていう方がどちらかと言うと興味ありました。

【間野　博　委員長】

太陽光発電ですね。他如何でしょうか。

【横山　敦子　委員】

今、岡村先生の方からお話がありましたが、今が繋がらなければ先は繋がっていかないと思います。町もそうですが家の継承も必要だと思います。避難で世帯分離が多くなり親が子に、子から親へ思いを伝えることが出来にくくなっています。急に亡くなってしまったとき何を伝えたかったのか、どんな人生だったのか、どういうお葬式をして欲しいか、誰に連絡するべきか具体的なことなどわからないでしまうこともあります。そういう事を耳にすると今のうちに伝え残すノートなどのツールが必要だと思います。市販されているものもあります。どうしたら、そういったエンディングノートを活用して、残していける方法はないか今、考えているところです。

【間野　博　委員長】

ありがとうございます。今のは、1 番のグループとも関係のある話ですね。いかに残すかという話ですね。他どうでしょうか、いかがでしょうか。他のグループの発表を聞いて何か思うところ。

【相楽　比呂紀　委員】

はい、私は第 1 希望が産業の誘致関係のグループだったんですけれども、1 番にさせていただいて大変充実した時間が過ごせました。産業というには人の意識的なことで考えていたんですけども、この復興が本当に実現するような形になると、実は今まで双葉にいた以外の新しい方々も多く双葉に来るような形になると思うんですね。事業者に関しても新しい事業者が増えると思うんです。もちろん事業に関しては競争社会なので頑張っていかなければならないと思うんですけれども、人に関してやっぱり新しい方が入ってくることも、もちろん今まで双葉にいた方が違う地域に行った私達全員がそうなので身をもって感じたと思うんですけれども、双葉に帰って新しい方々が入ってきた時に受け入れる体制というか意識を持つ必要があるんじゃないかというふうに感じました。

これから、もしかすると海外の方が来るかもしれないし、他の地域の方が多く来ると思いますので、そういう交流を意識していかなければならないのかなと感じます。はい、以上です。

【間野　博　委員長】

ありがとうございました。これは、4 番の人材の育成の中でも捉えなきゃいけないし 2 番の、新しい町の核、シンボル作りとかっていうところでも、そういう新旧住民の交流する場を作るとかそんなような事が必要なのかもしれないですね。

他いかがでしょうか。

【齊藤　六郎　委員】

私達グループで話し合っているうちに、何か絵に描いた餅になっちゃうんじゃないのかなと何ていう話もしていきましたけれども、絵に描いた餅にしない為にも私達はもちろん、本当に努力してそういうまちづくりを進めていかなくちゃならないというふうに思っております。

しかし、私達の力だけではどうにもなりません。町とそれから県、国の皆さんのお力をいただかないと、私達本当に復興するそういうその力と言うのは私らだけではとても足りませんので、その辺のところを絵にかいた餅にならない為にも私達頑張っていきますが、町、県、国の方々に一つご協力っていいましょうかお力添えお願いしたいなというふうに思っております。

とにかく避難者は、今生活していくのに精いっぱい頑張っておりますけれども、なお一層双葉町復興のために私達も頑張らなきゃならないというふうに思っております。以上です。

【間野　博　委員長】

ありがとうございました。もう一人第 1 希望から移っていただいた方がいらっしゃいます。川原さん、何か人材に関して何かありませんですかね。

【川原　光義　委員】

私しゃべると長くなって、結論が出るまで何か時間喰うということで。要するに何でもそうなんだけども、人づくりというか人、人間っていうのはものすごい無限の価値を持っているわけよね。色んな考えも持っているし。だから双葉町特有の、昔から教育の町双葉と言われてい

る状況に応じてよその大熊なり、楢葉なり、富岡なり、広野以外に双葉町はもう1歩でも2歩でも抜け出して人材の活用をして、我々避難した時、双葉町一番遅れて非常に心配したんですよ。

ですけども、新しい町長が出来て、組織体がしっかりして、なるほど双葉は人材の双葉だとそういうふうな気持ち方ができるなという部分を作ってもらいたいなと思ってその項目にいれたんですけども、時間もないし、この位にしておきます。

【間野　博　委員長】

ありがとうございます。先ほども、日本一、世界一の双葉の教育という話がありましたので繋がるところがあったかと思います。

他によろしいですか。では全体討議というのをこの位にしたいと思うんですが、私の方から少し感想といいますか言いますと、今日は難しいなと思ってたんですよ。この2回でかなり皆さんそれぞれの分野に関するご意見いただいていた中で、さらにそれぞれのテーマ毎に深めるということは簡単なことではないのでどうかなと思ったんですが、やはりやってみると皆さん活発なご意見いただいて、かなり前回議論した中身よりもさらに先に進んだご意見、或いは非常に具体的なご意見が出てきたと思います。

1番の将来に渡って残す双葉町に関しては、残すって何となく僕なんかは建築出身なので物、物を考えてしまうんですが、実を言うと残すものっていうのは物だけじゃなくて色んな残すものがあるんだっていう、多様な残す形があると思う。それこそ歌とか、それから味とか、そういうものも含めて双葉らしさというか双葉のものというのがあるんだと。それを何らかの形で継承していく必要があるといったことが出されたのかなと思います。

それから2番目の新しい町の核、シンボルということに関しては、その色んな残したいものの中でシンボルになるものは何かということだと思いますね。そういう意味では1と2もこれ繋がっているわけで、そこの中でこの清戸迫古墳がどこにもない双葉独特のシンボルとして、しかも皆が知ってる、しかも色んなものに使えるというようなことがあって、是非これを中心にしたらいいんじゃないかという提案。それとシンボルとか核という時に2つあるという、これは割と大事なことで、新しい核としてアトムバレー、昔からのものを引き継ぐ故郷として、引き継ぐものとしての観光的なものだとか、マリンハウスだとかバラ園だとかっていうようなもの、これの両方が核として必要なんだというようなことが出されたかと思います。

それから3つ目のエフヴィレッジ、産業構想ですけども。これも前回よりはかなり深まったかなと思います。特にここではどういうものをということに関しては、原発を中心とした廃炉とかロボットだとかっていうことは前からも少しあったんですけども、それをやはり国策としてちゃんと双葉町に持ってきてほしいんだということが非常にはっきりと出てきたかなと思います。

それともう1つは、そういういわゆる研究開発施設ができることによってそれに絡んで、それに関連して観光利用だとか、それからサービス、商業関係の関連する産業がよりさらに発展するんだという、この辺の勘というのが非常に大事なんだと思います。

それから4番目の次代の双葉町を担う人材の育成ということに関しては、これは実を言うと2番、3番目のエフヴィレッジとも関係してくるわけですね。つまり将来的に研究開発拠点というような形で作っていく、それと今の子供達を育成するということが繋がっていかなきゃいけないと。これも非常に重要な観点が示されたのかなと思います。

結局のところ、何か全体を見ますと1、2、3、4とテーマを分けましたけれども、実を言うとそれぞれに関連していると、関連させなければいけないということが最終的には結論としては言えるんじゃないかなと。それぞれに対してそれぞれで向かうだけでは駄目で、それを関連させて進めていくというようなことが大事なんだということが示されたのではないかと思います。

それでは今日の人材育成のところについて、ご意見が沢山出ましたので、教育長の方から感想をお願いしたいと思います。

【半谷　淳　教育長】

教育長の半谷です。前回に続いて今回のお話を大変興味深く、又こういうディスカッションを色んな妄想、構想も含めて色んなアイデアを出すことがとても重要なのではないかなと思いながら聞いていました。

今回特に、人材育成に教育についてご意見が出されましたので私も思うところがありましたのでちょっとお話したいと思います。

教育について今年、私のアイデアで町の方針として「可能性の追求」という言葉を設けました。先ほど川原さんが教育というのは無限の可能性だということをおっしゃいました。正にその通りだと思っています。3 年ぶりの学校再開ということを昨年 7 月に抱えてそこから私の可能性の追求が始まったわけでありますけれども、その対極にあるのがこれまたよく言われますバカの壁という言葉がありますけれど、どうせ出来ないだろうと、どうせ成績上がるはずがない、スポーツ、こんなちっちゃな学校でどれだけ成果が上がるんだ、よくそういう言葉が聞かれますが、正にそれこそが可能性の追求を阻む、阻害する言葉だろうと思って、とことん校長先生方、先生方には教育委員会のスタッフも含めてやってみなければわからないんだから目標は常に高いところに置いて頑張ろうということで進んできました。

まずは学校再開が半年ちょっとの間で再開というのが非常に難しかったんでありますが、これまた私の感覚ではこんなにもスムーズに学校再開が進むのかなという実感がありまして、あれよ、あれよ、あれよという間に全てのこちらの考えていた条件がクリアされて再開に扱ぎつけました。そして再開してからこれも初めての経験でありますが、同じ建物の中に幼、小、中が全て先生方、生徒が居住して教育活動が始まったわけですけれども、正に震災があったがためにこういう初めての経験が出来て 1 学期を終えることができました。

更に私の頭には、学校再開で 4 人の生徒が増えて 15 名という段階でありますが、キャパシティとしましては町のホームページにも出しましたけれども 200 名から 250 名が入るキャパシティがあります。目標はそこにありまして、限りなく生徒を増やしたいなと。生徒を増やすための根拠は、先程皆さん言われましたように特色ある教育、もっと具体的に言えば成績が上がる、或いはスポーツの成果がある、或いはいじめのない、そういったところが口コミで色んな所で宣伝されて 1 人、2 人と双葉の学校で勉強しようかなという生徒が、保護者が出てくるのではないかと思っています。

もう 1 つ重要な事は、やはり先生方の意識改革であります。せっかく再開して 11 名からそして 15 名と増えた子供達の力をどれだけ高めて、或いは中には他町村からわざわざ双葉の少人数学校にということで入ってきた子供もいます。この子供の可能性をどれだけ我々が高められるか今後の大きな課題だろうと。

もう 1 つ、中高一貫の話題が出ましたからですが、これも双葉郡全体の復興の為には 1 つの大きなプロジェクトだと思っています。こういう困難な状況の中で町の復興もそうですが、教育の復興も同様に困難さが付きまといます。震災前、700 名近くいた生徒が僅か十数名になってしまう。ですが、せっかく与えられたチャンスをどれ程先生方と力を合わせて、そして町民の皆さまのアイデアを活かしながら 1 つ、2 つと夢を実現させていきたいなと考えています。

最後に私が英語教師ですので英語教育に触れたいと思いますけど、今正に自民党政権、文科省も新しい英語教育へと舵をとりつつあります。現場では、この英語教育も何十年も 2 つに分かれています。つまり、話す、聞く、実際的な力を小さい時から養えという意見と旧来の、いや日本人は日常的に英語を使う必要がないんだから文法中心、訳読中心の英語教育で十分なんだという意見と真っ二つに分かれています。私は長年英語教育に携わって結論としては、英語教育の低年齢化、そして言葉を道具として本当に正に誰か言いましたように、子供のうちに英語に触れるということは恥ずかしさも障害も大人になって学ぶよりははるかに少ないので、慣れさせるということは必要でしょうと。同時にやはり日本語をきちんと学ぶということも大切なので、そのことも同時に追求していきたいなと思っています。

長い取り組みになりますけれども、少しずつ成果を上げていきたいなと思っています。あり

がとうございました。

【間野　博　委員長】

ありがとうございました。それでは最後に町長から今日のワークショップでの議論を踏まえての感想をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

【伊澤　史朗　町長】

皆さん、長時間に渡りまして大変御苦労様でした。前回は一人一人に対しましてお話をさせていただきましたが、話が長かったというご批判もありましたので相対的な話に今日はさせていただきたいと思います。

まず1番目の将来に渡って残す双葉町。これは、記録であり記憶であり、正に今よく出てくる言葉でアーカイブということに関連してくるのかなというふうに思っています。そんな中でも先程相楽君からお話があった神楽は私自身も実際頭をやっておりまして、この皆さんには見えませんけども奥歯はありません。これ神楽の結果奥歯が駄目になってしまいまして、入れ歯を入れなくては使えないというふうに、神楽というのはそれ位奥歯を使って噛みしめると、そういうふうな伝統芸能であります。

そのようなことも踏まえまして、町として1つでも2つでも残してほしいというご意見がありました。これは、2番、3番、4番のことで皆さんの話を聞いてたらやはり町の復興拠点イコール研究施設、町が戻るためにどういうふうに今後取り組んでいくか。それと町に戻るまでこの町外拠点をどうするかということの話が相対的に入ってくるなというふうに感じております。そういったことでまず町に戻るまでの町外拠点として、双葉町では4か所復興公営住宅を県の方に要望しております。先般、町の4か所の場所について住所が公表されたところであります。そんな中で、こちらに役場もありますし、いわき市南部の地区に双葉町の町外拠点の中心地に据えるべきだろうと、というのは全国39の都道府県、そして今現在も380の全国の自治体に避難を強いられている町民の皆さんが分散をしている状況です。それをいかに集約していくかということが今後の双葉町の存続に関わってくる一大、重大なことであろうと。

先程教育長も話しましたけども、人材の育成ということも踏まえて、ここで何とか双葉町に戻るまで町民の皆さんを集約して、双葉町に戻るまでの間何とかしていきたいと、そういったことからこの地元の勿来地区の人達との交流も大切でありますし、こちらの勿来酒井青柳に予定をされております復興公営住宅。これが約200戸の予定であります。その内、概ね190戸が双葉町民の為の対応になっております。

国、県に申し上げているところは、双葉町の特殊事情を鑑みると、そう早急に双葉町に戻ることは難しいと。この状況を考えた時にそういうふうなことを導き出すのはどなたが思ってもそうだろう、と。

そういうことで特殊な町だということを強く国、県には申し上げております。そういったことから戸建て二戸一、そして低層階、中には住宅施設だけではなくて医療、介護、集会施設、そしてその集会施設も全国から集まってくる町民の皆さんが集まって集会をして、なおかつ宿泊もできる施設も併設させたい。そういうふうに考えております。

当然、その200戸の中に住んでいる住民の人達のためには、医療を充実させなくてはならないので、双葉郡町村会の中での話し合いの中でようやく郡立診療所を双葉の勿来に予定をしております復興公営住宅の中に入れるということが概ね決まりました。そういったことでまず町民の皆さんが残って生活する。ここに役場もあります。

そして、幼小中の学校もできました。今後は高齢者の色々な福祉、医療に関して特別養護老人ホーム。これは町が経営していたわけではありませんが、双葉町にありました「せんだん」、こちらもこの地で何とか再開できるように今いわき市と県と協議しながら取り組んでいるところでございます。

そういったことでまずこのいわきに町民の皆さんが集まっていただけるような仮の町というほどではありませんが、町外拠点。そして、何故このいわきが町外拠点の中心になり得る場所でいいかということは、こちらに住んでいますと、いわき勿来インターが大体10分から15分

でインターまで行けます。そして双葉町へ戻るためには、今国に要求、要望しているのは復興インターを是非双葉町に作っていただきたい、とそういうことでこれを何とか具現化することによって、二地域居住ということで双葉の先程、菅本さんからもありましたけれども避難指示解除準備区域につきましては先般、除染の計画が発表されました。

そういったことでそう遠くない時期に中野、中浜、両竹につきましては、まず除染ということは完了できます。それだけでは心許ないし、96%の帰還困難区域に関して昨年は3か所モデル除染ということでやっていただきました。今年は役場、そして双葉中学校、双葉高校、コミュニティセンターということで要望を出しておりますが、まだその部分では決まっておりませんが先般、根本復興大臣と1対1で約1時間お話をさせていただく機会をいただきました。

その中で、帰還困難区域に関しては、国は積極的な除染をして戻れるような構想を持っていない。でも双葉町に関しまして、この3年数か月によって除染も何ら手を加えていないエリアでも自然減衰によって線量がかなり下がっている場所がある、と。そういったことを今町独自に線量測定をしておりまして、そういう地図を今作っております。そういった中で戻れる可能性がある地区を国の力によって全面的な除染、復興インフラをすることによって双葉町の復興拠点になり得るんではないかと、そういうふうな構想として国に働きかけをしているところでございます。

そんな中、大臣におかれましてもかなりご理解をしていただいたんではないかというふうに受け取っておりますし、先程この2番、3番、4番の中で話出てきましたが、戻る為には産業や人材育成、そういったものが必要だろうと。そういった中で復興拠点になり得る場所が出来たとするならば、まず廃炉に関わる産業の研究機関、育成施設、除染、そして新エネルギー、再生可能エネルギーを含めたそういったものの研究機関を双葉町としても積極的に誘致をしていきたい。

そういったことでそれに関わるいわゆる人材育成に関わる設備も必要でしょうし、そういったものの研究者のための宿泊施設、そういった関連するものの色々なものの付帯施設が必要になってくると。そういったことから新たな産業が生まれてくる可能性もありますし、当然そちらに住まわれる人達も必ずや出てくるだろうと。そうしたことによって双葉町民でも昨年の意向調査では十数%しか町に戻るという考えを持たれてない方もおられますが、新たな住民と旧の住民をうまく融和をすることによって新しい町づくりも可能になってくるだろうと、そういったような大体外力ではございますけれど、町としてもそういうふうな考えを持って、如何に具現化出来るか。

今年は冒頭の挨拶で復興元年にしたいということを申し上げております。そういったことで何とか一つ一つ具体的に皆さんの今お話があったようなことの一つ一つ実現に向けて取り組んでけたらと思っております。皆さんの今日のお話、非常に参考にさせていただけるようなものが多かったと思っております。そういったことで今後具体的にどういったものをそういうふうな取り組みに活用できるか町としても検討させていただきたい、そのように考えております。

今日は大変御苦労様でした。

3．閉会

【間野　博　委員長】

ありがとうございました。それでは、今日の議論をこれで終わりたいと思いますが、次回今日の議論をまとめて、次回どのように委員会をやるかということについては、また副委員長、2人の副委員長と共に議論をさせていただきまして、次回の委員会の進め方、テーマ、議題について皆さんにお伝えしたいというふうに思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは事務局の方にバトンを渡します。

【事務局　細澤　界】

では事務局の方から説明させていただきます。参考資料として事前にお配りしました、復興公営住宅の建設予定地の位置図についてご説明させていただきます。先程町長の感想の中でも

述べられましたけれども双葉町には今後、県に要望して整備をしていただく復興公営住宅の中で双葉町民の復興拠点、生活再建の基盤として期待、整備される予定のいわき勿来酒井地区、郡山市の喜久田町、南相馬市上町、白河市鬼越地区が先月発表されておりますので、資料を通してお配りしました。皆様方にも目を通していただきたいかと思います。具体的な進捗状況は各地区で異なっておりますけれども、今の予定ではこの住宅については平成 27 年度中の完成を目指しておりますのでお知らせいたします。

なお次回の委員会についてですけれども、先程委員長からもお話がありましたが今回の議論を踏まえて整理をした後、委員会をどのように進めていくかを副委員長とご相談をした上で決めていきたいと思います。

後日改めて通知を出したいと考えておりますので、その際にはまた是非とも都合をつけてご参加の方、よろしくお願いしたいかと思います。以上です。

【間野　博　委員長】

ありがとうございました。それでは本日予定しておりました議題については以上でございます。今日の委員会をこれにて終了させていただきます。ご協力ありがとうございました。

以上

第9回双葉町復興推進委員会座席表（グループ発表・全体討論）

（敬称略）

１　日時　平成26年7月23日（水）
　　13：00～16：30
２　場所　双葉町いわき事務所　2階大会議室

高田　秀文	3	伊藤　哲雄
菅本　洋		川原　光義
中谷　博子	4	石田　恵美
松本　浩一		大橋　正子

高野　陽子	1	相楽　比呂紀
山本　眞理子		田中　勝弘
		齊藤　六郎
横山　敦子	2	小川　貴永
		岡村　隆夫

復興庁
石川　悟
参事官補佐

復興庁
福島復興局
須田　亨
参事官
福島復興局
いわき支所
林　文之
次長

福島復興局
いわき支所
横山　大輔
参事官補佐

福島県
避難地域復興課
佐藤　庄一
総括主幹

福島県
生活拠点課
根本　朝彦
主査

猪狩建設課長	産業浩	山本弥	税務課一長	平岩邦弘	秘書広報課長	船来丈夫	総務課長	武内裕美	総括参事	伊澤朗	町長史
間野博	委員長	半澤浩司	副町長	半谷淳	教育長	松本信英	住民生活課長	志賀睦	生活支援課長	大住宗重	健康福祉課長

事務局(復興推進課)			事務局(復興推進課)						事務局(復興推進課)		
小山勲	支援員	由波大樹	支援員	西牧孝幸	主事	橋本靖治	主任主査	細澤界	課長補佐	駒田義誌	課長
今泉祐一	教育総務課長	山下正夫	議会事務局長	半谷安子	会計管理者	山下明弘	副主査	米山治介	支援員	山中啓稔	支援員